

図書館だより

図書委員会

お薦めの本特集号③

今年度赴任された先生方にお薦めの本を紹介していただきます。今回は保健体育科の木谷僚先生と、国語科の河島浩先生、英語科の森田舞子先生、藤井均先生、実習助手の小牧洋子先生です。

『おもしろい！進化のふしぎさんねんいきもの事典』

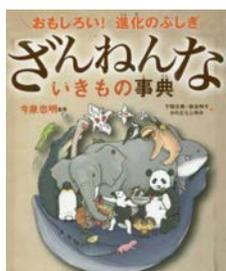
今泉 忠明（監修）

「ワニが口を開く力は、おじいちゃんの握力に負ける」。凶暴なイメージのあるワニです。動物の中で最も噛む力が強いと言われてるのが大きき六メートル以上の「イリエワニ」。ワニがかみつく力は半端じゃなく強く、口だけで小型トラックぐらいの重さのものをかける事が出来るので、大抵のものは噛み砕いてしまいます。しかし、その反面、口を開ける力は三〇キロほど。日本人の平均的なおじいちゃんが片手でおさえこめるほど弱い力しか出せません。

「キツツキは、頭にクルマが衝突したぐらいの衝撃を受けている」。キツツキと言えば、くちばしをコンコンと木に打ち付けて、穴を開ける事で知られています。その速度はなんと一秒間に二〇回。この時に頭にかかる力は重力の千倍。これは人間で言うと、頭にトラックがぶつかった時と同じぐらいの衝撃だそうです。長い舌が頭の骨を囲んで保護しているほか、脳が小さいことから、致命的なダメージを受けないと言われています。

このように、なんだか「さんねん」な感じがするいきものたちの知られざる生態をイラスト入りで紹介しているのがこの本です。進化ということがよくわかります。小学校中学年向けにつくられた本ですが、高校生が読んでも十分に楽しめる内容だと思います。自分が知っている生き物にそんな意外な一面があったのかという驚きの連続です。気軽に読めて、知的好奇心を満たすことができるおすすめの一冊です。

木谷 僚 先生



笑えて、ちょっとためになる！生き物たちのおどろきの真実。思わずつっこみたくなるいきもの122種のお話。

図書館にあります。

『チーズはどこへ消えた？』

スペンサー・ジョンソン 著

門田美鈴 訳

この物語に登場するのはネズミのスニッフとスカリー、小人のヘムとホー。二匹と二人は「迷路」の中に住み、「チーズ」を探します。「チーズ」とは、私たちが人生で求めるもの、つまり、仕事、家族、財産、健康、精神的な安定などの象徴です。「迷路」とはチーズを追い求める場所、つまり、会社、地域社会、家庭などの象徴です。この一見シンプルな物語には、状況の急激な変化に対応すべきかを説く、深い内容が込められているのです。

数々のスポーツ選手が読んでいるビジネス書で、北海道日本ハムファイターズの大谷翔平選手の愛読書です。変化を恐れず、前向きになりたい人にお薦めの本です。

河島 浩 先生



図書館にあります。



図書館の太宰治全集の中にあります。

『お伽草子』

太宰 治 著

昔話の定番といえど聞かれたら、桃太郎に浦島太郎、カチカチ山、瘤取り爺さん、舌切り雀などなど：たくさんタイトルが頭に浮かぶのではないのでしょうか。私が紹介する『お伽草子』にも、これらの作品が収められています。しかし皆さんが知っている作品とは、なんだか違う。そもそも、登場する人物の設定がまるで変わっているのです。

例えばカチカチ山。元々は、優しいおばあさんにひどいことをしたタヌキに対し、復讐のためにウサギがタヌキを成敗する、というお話です。太宰治はここに登場するウサギを16歳の美少女、タヌキを37歳の醜男という設定で、話を進めます。美しいウサギに恋したタヌキは、ウサギの態度に翻弄されながら、最後には泥舟で沈められてしまうのです。

本来の話であれば、ひどいのはタヌキのはず。しかし、ウサギに恋をしたタヌキが、ウサギに成敗

されてしまうとなると、なんだかタヌキが可哀想に思えてきます。

この話は最後、こんな文で終わります。

「女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでいるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかってあがいている。作者の、それこそ三十何年来の顔(すこぶ)る不振の経歴を徴(ちよう)して見ても、それは明白であった。おそらくは、また、君に於(お)いても。後略。」

皆さんが知っているお話とは一味も二味もちがう『お伽草子』。とても面白い話なので、是非一度読んでみてください。

森田 舞子 先生

『ピブリア古書堂の事件手帖』シリーズ

三上 延著

剛力彩芽主演でテレビドラマ化もされた数年前からのシリーズです。読みやすい筆致ですらすらと読み進むことが出来る短編く中編集。ちよつと空いた時間に少しずつ読んだり、電車に乗っている間に読んだりしても、また続きを読む時にはすんなり話の筋に戻っていただけます。主人公で古本屋を経営する葉子さんを中心に、登場人物たちが、その話ごとに一冊の古本とそれにまつわるエピソードについての謎を解きあかしていくという展開です。様々な作家たちの古本が登場するので、その作品にも興味を持って読んでみるのもいいですね。そうやって色々な作品を知ることができるのも魅力です。

鎌倉の片隅でひっそりと営業をしている古本屋「ピブリア古書堂」。その店主は古本屋のイメージに合わない若くきれいな女性だ。残念なのは、初対面の人間とは口もきけない人見知り。接客業を営む者として心配になる女性だった。だが、古書の知識は並大抵ではない。人に対してと真逆に、本には人一倍の情熱を燃やす彼女のもとには、いわくつきの古書が持ち込まれることも、彼女は古書にまつわる謎と秘密を、まるで見てきたかのように解き明かしていく。



図書館にあります。

藤井 均 先生

『暗幕のゲルニカ』

原田マハ著

高校生に薦める本の選定はとても難しい。最近、高校生の読書傾向について考えたことはなかった。図書委員から原稿依頼をされて「はて？」と考えてしまうほど難問である。私自身、読書は嫌いではないし小さい時には絵本がすきで、小・中学生では「二十四の瞳」や夏目漱石と、その後は灰谷健次郎著作の「兎の目」や「太陽の子」等を好んで読んでいた。とにかく図書室や学級文庫などを活用していた記憶がよみがえり、ジャンルにかかわらず本のあるところに足を運び読んでいた。お薦めの本として紹介するよりも、まずは皆さんの身近にある学校の図書館で本を探してみることをお薦めする。

図書館には古くからの文学書から推理小説、最近ドラマ化された東野圭吾、宮部みゆき著作のサスペンスや小説なども入っているし授業に役立つ本、話題の本、直木賞などの受賞本、進学に必要な参考書なども揃っている。また、ゆつくりくつろいで絵本や雑誌・写真集なども読むこともできる。足を運んで何気なくぐるりと眺めてほしい。きっと読みたい本が見つかると思う。

私も図書館で、原田マハ著『暗幕のゲルニカ』新潮社出版の本を見つけた。図書館で何気なく手に取った本である。この本の表題紙の裏に

『芸術は飾りではない。敵に立ち向かうための武器なのである。―パブロ・ピカソ』と書かれている。

とても意味深く忘れられない言葉に惹かれた。この絵は見たことがある。丸の内オアゾの広場の壁面に据えられているからである。本物ではなくレプリカであるが、『ゲルニカ』の原寸大(レプリカ)の陶板(セラミック)である。その前でいすに座り眺めた記憶がある。偉大な画家ピカソはこの絵を描いて何を託したのかと鑑賞したことがある。この本は、1937年スペイン内戦の際に、ナチスによるゲルニカ空爆に怒りを爆発させたピカソが反戦の思いを込めた作品「ゲルニカ」の展示をめぐる内容である。混乱や戦争を経てニューヨークに展示することができるのか：フィクションである。スペイン北部のバスク地方にあるゲルニカ、そしてピカソの反戦、憤りの作品「ゲルニカ」は当時の歴史的背景と現代がおもしろく描かれている。私たちは歴史から大切なことを学ぶ。本や絵画の書き手の思いを読み取る必要がある。まずは図書館で読みたい本を探すことをお薦めする。

小牧 洋子 先生



図書館にあります。